

令和元年度 世界農業遺産小学生作文コンクール 入選作品集



○最優秀賞

国東市立安岐中央小学校 秋吉 優衣香 「世界農業遺産と自分が学んだこと」

○優秀賞

杵築市立大田小学校 田原 蓮央 「ぼくの世界農業遺産」

豊後高田市立香々地小学校 大力 誠也 「世代をつなぐ」

○入選

豊後高田市立香々地小学校 志太波 麻衣 「わたしのふるさと香々地」

豊後高田市立桂陽小学校 城 葵衣 「自然を守る」

豊後高田市立桂陽小学校 田中 天喜 「世界農業遺産を学習して」

国東半島宇佐地域世界農業遺産推進協議会



国東半島宇佐地域世界農業遺産 Kunisaki Peninsula Usa GIAHS

令和元年度「世界農業遺産小学生作文コンクール」概要

1 目的

次代を担う小学校第5学年及び第6学年を対象とした作文コンクールを実施することにより、広く世界農業遺産に対する関心を高め、理解を深める。

2 主催 国東半島宇佐地域世界農業遺産推進協議会

3 実施内容

- (1) 名称 世界農業遺産小学生作文コンクール
- (2) 対象 国東半島・宇佐地域内在住の小学校第5学年及び第6学年の児童
- (3) 課題 「私のふるさとの世界農業遺産」 (題名は自由)
- (4) 原稿 400字詰原稿用紙3枚以内 (1000字～1200字程度)
- (5) 応募数 域内21小学校より102点

○最優秀賞 「世界農業遺産と自分が学んだこと」

国東市立安岐中央小学校 6年 ^{あきよし}秋吉 ^{ゆい か}優衣香

私は、世界農業遺産に国東半島宇佐地域が入っているとは知りませんでした。だから、世界農業遺産に国東半島が入っていると知ってとてもびっくりしました。私は「木が食料を産む〜クヌギとため池がつなぐ農林水産の輪〜国東半島宇佐地域世界農業遺産」という本を読みました。今、地球の人口はとても増えています。そうすると増えた分だけの食料が必要です。そこで、食料を増やすためにどのようなことをすればよいかというと、農業です。農業をすることで自分で野菜をつくったり、米をつくったりすることができます。農業は進歩もしています。たくさん収穫できる機械や、たくさんの実ができるような品種改良、甘くておいしい果物になるような品種改良など昔から農業をする人たちはいろんな工夫をしてきました。世界農業遺産はいろんな価値をもつ伝統的な農業を次の世代に引きつぐことが目的なのだそうです。そうわかると国東市の農業は私たちが受けつがなければいけないなあと思いました。

私の家では、米、野菜、しいたけをつくっています。すべて自分の家でたべています。私は一度家族みんなでしいたけの山へ行きました。とてもじめじめしていてたくさんの木にたくさんのしいたけがはえていました。私のおばあちゃんの家でしいたけを作っていました。何年か前まではしいたけをかんそうさせてパッケージづめをしていましたが、おじいちゃんが亡くなってからは、自分の親せきや家族の分しか作っていません。だんだん年をとってくるとしいたけ作りも難しくなってきます。そしてしいたけを作る人がどんどん減っていきます。そんなときこそ次の世代の人が農業を受けつぐことでこれから先の未来へ農業をつないでいくことができると思います。

そのためにできることを一つ考えました。それは、小学生のうちから大きな畑で野菜などの植物を育てることです。学校には花だんがあるけれど草むらになっていてちゃんとお世話をしていません。一か月に一回でも畑で農業をする時間を入れるといいと思います。子どものときから野菜をつくっていれば農業に親しむことができると思うからです。

私はこの作文を書いてあまり農業の手伝いをしていなかったなあと反省しました。これからはもっと積極的に手伝いをしようと思います。そして私たちが今の農業をついで次の世代へとつないでいけるようにしたいです。そのために、これからどんどん農業の手伝いをしていきたいです。

「世界農業遺産って、何のこと？」「富士山のことかな。」「お米作りのことかな。」「お米作りだったら、新潟県の方が有名だ。」「なぜ、ぼくたちが住んでいる国東半島が、指定されたのだろうか。」

世界農業遺産について学習が始まった時、ぼくの頭の中は混乱した。まして、椎茸が、関係していると聞いて、「あの椎茸？おじいちゃんが作っている椎茸作りのこと？」と、疑問に思うことだらけだった。でも、椎茸を作るために祖父たちと一緒にこま打ちをして楽しかったことも思い出した。

ぼくは、家に帰って祖父たちに椎茸作りのことを聞いてみた。若い頃から椎茸を作っていたが、その作業が大変で途中でやめたこと。でも、7年前から、再び椎茸作りを始めたこと。曾祖父から受け継いだくぬぎ林があったから、今は細々だけど作っているということを知った。

学習していく中で農業遺産に国東半島の米作りも関係していることが分かった。ぼくたちは、昨年、安東さんという地域の米作り名人に教えてもらってお米を作った。同級生は5人しかいない学年だけど、15人以上の地域の方々が田植えや稲刈りに協力してくれた。白ひげどぶろく祭りでは、お米を売って、地域の方や観光客の方が買ってくれた。おいしい大田のお米をみんなに食べてもらえた。ぼくたち5人は、みんなに感謝した。安東さんは17年間ずっと大田小で米作りにかかわってくれている。15人以上の地域の方々は、毎年米作りを手伝ってくれている。この米作りも代々受け継がれてきた一つの農業遺産だとぼくは、感じている。

白ひげ神社で作られているどぶろくは、大田のお米を使っている。千年以上の歴史がある。5年前、ぼくの祖父は、杜氏を受け継ぎ毎年9月25日の醸造始めの儀から、朝早くから、時に夜中に、どぶろくの様子を毎日見に行っている。杜氏になる13年前から助手として手伝ってきて、前の杜氏の芦刈さんから指名されたそう。蒸したお米をこうじと混ぜ毎日ふき出さないように混ぜる。アルコール分のない最初の頃のどぶろくを飲んだことがある。米粒が残っていて口の中でごろごろとした感じがあり、思わずはき出してしまった。でも、口の中に甘さが残っていたことは覚えている。

ぼくは、この学習を通して、椎茸作り、米作り、どぶろく作り、全て祖父がこれまで苦勞してやってきた大切な仕事は、全部世界農業遺産につながっていたことなんだと実感した。椎茸とため池の循環など人の知恵や仕事によって遺産はつくられてきた。人の思いを受け継いできたからこそその農業遺産なんだと思った。これまで、あまり話すことのなかった祖父と少し話せて祖父のことを知れた。

ぼくの家は農家です。主にしいたけを作っていますが、季節に合わせて、夏はトマトやキュウリ、ゴーヤ、冬は白菜や大根その後は玉ねぎやじゃがいもと、畑では年中なにかしら野菜が植えられています。

ぼくを家の野菜作りのモットーは、「自然にまかせて作る」です。それは消毒をしない水をやらない（できるだけ雨にまかせる）ことです。そのため、結構虫がいるけれど、お母さんたちは

「虫がいるのが、おいしいしょうこ」

と言っています。ぼくのお気に入りの野菜は今から二年前に出会ったズッキーニです。ズッキーニは、葉も大きく、くきもズッキーニと同じぐらい太いので、「もう、ないだろう」と思ってもよく見ないと収穫の時に見逃してしまいます。すぐに大きくなるので、見つけたときには、お化けズッキーニになっています。他にもまだ知らない野菜がたくさんあるので、これからいろいろ育てて食べてみたいです。

ぼくの家では「ゆうじろう」と「とよくに」という種類のしいたけを作っています。お父さんのしいたけ作りはクヌギの木を切ることから始まります。山に行ってたくさんのクヌギを切って、一本ずつ丸太にしていきます。ぼくは、ついて行ったことがないので、「雑木林の一年」という本を読んで、山から木を切り出す作業の大変さを初めて知りました。そのほだ木一本一本にドリルで一つ一つ穴をあけ、その穴に種こまを打ち込んでいきます。家族総出の、一番大変な作業です。そして、こまが打ち終わると、打った木を伏せこみます。いろいろな伏せこみ方がありますが、ぼくの家では、「よろい伏せ」という伏せ方をしています。ぼくたち香々地小学校でも地域の水見さんの指導で「しいたけ作り」をしています。しいたけ作りは、三年生からスタートし、学年ごとに作業をし六年生でやっと収穫できるととても長い時間と手間がかかる作業です。ぼくの家でも、いよいよ収穫の時となるとこれもまた家族総出の作業です。一つ一つ収穫したしいたけは、乾燥した後、大きさに合わせて四段階に仕分けして出荷します。以前は、大きな穴のあいたふるいをふるって仕分けをしていましたが、今は機械で分別し楽になったそうです。でも、割れているものや傷があるものは出荷できないのもう一度人の目で一つ一つ確認してからやっと出荷となります。

ぼくは、このしいたけ作りなどの仕事をお父さんから学び、受け継いでいこうと思っています。そして、「自然の力」を大切にしながらがんばっていきたいです。

○入選 「わたしのふるさと香々地」

豊後高田市立香々地小学校 6年 ^{したば}志太波 ^{まい}麻衣

私は、香々地が大好きです。それは、山・川・海など美しい自然がいっぱいだからです。香々地のブランドのガザミはこの美しい自然の中で育ち、全国に出荷されています。私たちの学校ではこのガザミの稚魚を放流し、大きく育ったガザミを浜ゆでにして全校で食べるとても魅力的な行事があり、毎年楽しみにしています。

私の家は、国の名勝に指定された中山仙境のある夷谷の中にあります。家の周りにはビワや柿などいろいろな種類のくだものが植えられ、家族で季節ごとの味覚を楽しんでいます。

家の前には田んぼが広がっています。その田んぼで、おじいちゃんが主に米を作っています。冬の間さみしそうな田んぼにトラクターが入りたがやされ、「ゴー。」という音とともに、となりの田んぼから田んぼへと次々に水が入っていくと、田んぼは一気に生き生きとしてくる感じがします。家から少し登ったところに大きくて深いため池があり、そこから一斉に水が流れてくるのだと聞きました。雨が少なく、ため池の水位が下がると心配だと言います。反対に雨が多いのも困るそうです。また、台風の時もおじいちゃんは稲が倒れないかと、とても心配そうにしています。私は、米作りは、自然と一緒に作っていくものなんだと思いました。

今は、稲がたてにきれいに並び収穫の時を待っています。

田植えや稲刈りの時期はおじいちゃんだけでなくお父さんたちも一緒に働いています。秋の収穫の後の新米はとてもおいしく、心をこめてつくっているおじいちゃんに感謝して食べます。これからも毎年毎年、元気で作り続けて欲しいと思います。

私は『じいちゃんの森 森おやじは生きている』を読み、たいちのおじいちゃんも自然を大切にしながら一緒に生活しているんだと思いました。そして、「じいちゃんの森」と同じような森がわたしの周りにもあると思いました。その森は、クヌギだけでなく、たくさんの動物も住んでいる森です。森の中を歩いていると、風の音、水の流れる音やいろんな種類の鳴き声を聞くことができます。その音を聞いていると、とてもリラックスして優しい気持ちになります。

これからもこの大好きなふるさと香々地の自然を大切に守り、次へとつないでいきたいです。

○入選 「自然を守る」

豊後高田市立桂陽小学校 5年 城 葵衣^{じょう あおい}

私たちの住んでいる、国東半島は、六年前に世界農業遺産に認定されています。そのことについて、総合的な学習の時間に調べ学習をすることになりました。私は、この地域の自然が守られているということから「自然が守られているとはどういうことか。」考えてみることにしました。

自然が守られていなければ見られないものとして、まずホタルが思いうかびました。豊後高田市の田染の荘には、毎年多くのホタルが飛び交い、その様子を見るため観光客もわざわざ立ち寄ってくれます。ホタルの生態を調べると、水が重要なことがわかります。ホタルは、幼虫のときには、きれいな水の中で育ちます。そして、水から出て、成虫になり恋の季節をむかえます。

もしも、川やその周りをコンクリートなどで固められていたらどうでしょう。ホタルが育つ川ではなくなってしまうということです。たとえ育ったとしても、コンクリートの壁をよじ上がることはできないでしょう。つまりホタルが見られなくなるのです。

川のはんらんなど、水の災害がよくニュースに出ます。その災害を防ぐためにも川の工事は必要なときもあるでしょう。しかし、人間にとって安全で、便利な暮らしが自然界でも安全ではありません。

田染では、多少の不便がありながらも、千年前からの農業形態を守っています。だから世界農業遺産に認定されることにつながったのです。自然の川や昔ながらのため池を大事にすることで、ホタルなどの生き物が大事にされてきたのです。ホタルの季節だけでなく、田染の荘の棚田は、とても美しいです。

もし、効率の良い農業をするために、広い土地を求めて森林を切り倒したり、水利用のための工夫をしたりすれば、たくさんのお米が食べられるかもしれませんが、生き物はいなくなるのです。日本のどこに行ってもホタルが見られなくなってしまうのです。

美しい景色や、小さな生き物を守るためにも、森林や池、川を昔ながらのすがたで守っていくことが大切なんだとあらためて感じました。

森林や川や池は、動物、植物の命をつないでくれているところです。きれいなところにしか住めないホタルだけではありません。豊かな森林があるから、木々の樹液をすって昆虫が育ちます。多様な生き物がいるから森林は豊かになります。そして、その豊かさがあるから、私たちもおいしい水が飲めるのです。やはり、自然を守ることは生き物を守るにつながります。私たちの住むところが世界農業遺産として、世界に認められていることをほこりに思っています。

○入選 「世界農業遺産を学習して」

豊後高田市立桂陽小学校 5年 ^{たなか}田中 ^{てんき}天喜

授業で、豊後高田市の農業について調べることになりました。ぼくは、すぐ近くに住んでいるのに「田染のしょう」のことも豊後高田市が「世界農業遺産」に認定されていることも知りませんでした。しかし、今回の学習で、あらためて豊後高田市がすごいと思いました。理由は、二つあります。

一つ目は、じゅんかん型農業をしていることです。じゅんかん型農業は、自然のすばらしさを生かした農業です。土が豊かであれば植物はよく育ちます。そのために化学肥料を使うことがあります。しかし、じゅんかん型農業は、化学肥料が必要ないのです。雑木林の動物は、草を食べたり、樹液をすったりして生活します。ふんも、死がいもたくさんの動物が集まれば多くなります。ふんや死がいは、落ち葉とともに分解されて土の栄養になります。すると、土が豊かになり動物にとって都合の良い植物がすくすくと育つのです。化学肥料や農薬は必要ありません。しかも栄養もあるのでとても都合が良いです。雑木林では、落ち葉が出るだけではありません。その中で育つクヌギを使ってシイタケを栽培しています。クヌギの栄養を使ってシイタケは成長するので、やがてクヌギはくちはたてていきます。しかし、シイタケのほだ木としてくちはたてるころには、新しいクヌギが育っているのです。ぼくは、よく考えられた農業だなと思います。

二つ目は、昔ながらの農業形態を守っていることです。自然をこわさないという点では一つ目の理由と同じことかもしれません。

豊後高田市の田染地区は「田染のしょう」と言われています。初夏にはホテルがたくさん飛びます。まただんだんになったたな田に育つイネの景観はとても美しいです。

田染の荘は、宇佐神宮の荘園として千年以上前に開拓されその後、その農業形態を守り続けてきているといわれています。たな田では、大型機械が田んぼに入らず不便です。しかし、人間にとって便利なことが自然にとって良いこととはいえません。不便さを感じながらも豊かな自然を守るために伝え続けた作物の育て方に感心しました。

世界農業遺産に認められるところは決して多くないと思います。豊後高田市が認められていることがうれしいです。すごいことだと思います。しかし、引きついでいかななくては意味がありません。これから先も農業遺産として認められている農業の良さを伝えていくことが大切だと思います。